

ダーナ

浄土宗平和協会会報 VOL.

Dana

17

「ダーナ」とはサンスクリット語で、[布施]の意。

ダーナ●第17号
発行日●平成22年12月28日
編集／発行●浄土宗平和協会（JPA）
発行人●荻野順雄

Jodo Shu Peace Association

創立20周年を迎えた浄土宗平和協会（JPA／理事長荻野順雄）は、本年度も「NGO支援」「ブック・ギフト」「平和賞」「スタディーツアー」の四つの主事業などに精力的に取り組んでいる。創立20周年を記念して、来年度記念誌を発行するほか、浄土宗保育協会、浄土宗児童教化連盟と協働して共通ポスターを作製する。11月末には第3回ブック・ギフトin Tokyoを実施、約40人の私費留学生に希望する書籍を贈った。

平成2年に「浄土宗平和推進協議会」として発足した浄平協は、来年度、協会として再スタートして5年目を迎える。会員も400人近い規模となり、名実ともに浄土宗唯一の平和団体、公益教化団体として活動している。本年度はこれまでに、これまで宗務庁に一部依存していた教会の諸事務を「浄平協事務センター」を発足させて、事務、経理を行い始めた（詳しくは11ページ）。また、宗教のつぼであるイスラエルの都市エルサレムやパレスチナ地区、さらには旧東ローマ帝国の首都で歴史遺産が数多く残るトルコ・イスタンブールへ、NGO支援事業で協働関係にあるパレスチナ子どものキャンペーン（CCP）、日本国際ボランティアセンター（JVC）の協力でスタディーツアーを募集したところ、募集定員を上回る方々に、応募をいただいて募集を締め切った。来年2月下旬出発に向けて、関係団体と調整している。

第3回となるブック・ギフト事業は、11月末、大本山増上寺で希望図書
の贈呈式を行った。参列の留学生41

創立20周年を迎えて 公益団体と連携し 横の広がりを

人は、同寺大殿で行われた日本仏教伝統の儀礼に目をみはり、希望の図書を受け取り、感動の面持ちだった。来年度は、浄平協滋賀支部のみなさまのご協力で、ブック・ギフト in Kansai（仮称）を開催する予定で、調整を行っている。

同じく第3回の浄土宗平和賞は、社会参加する寺院、浄土宗教師を顕彰する活動で、来年1月末の締め切りで、会員らに、推薦を依頼している。来年3月に選考委員会を開催し、来年6月予定の総会の席上、平和賞受賞者に副賞の盾、支援金などを授与する。NGO支援では、みなさまからいただいた浄財「平和念仏募金」をもとに、今年10月、JVC、CCPほか、シャンティ国際ボランティア会、NPO法人ユニ、反差別国際運動、ジュマ・ネットなどに活動資金を提供した。

本年度の「平和念仏募金」を、この場を借りて是非寄せていただくようお願い申し上げます。

希望する本を受け取る留学生



感動の輪は国境を超えて ～第3回ブックギフト、43名に希望図書を贈呈～

希望する図書を受け取り、大本山増上寺に留学生の笑顔があふれた一浄土宗平和協会の主事業として位置づけられる私費留学生希望図書支援の第3回ブックギフト in Tokyoの授与式が、11月28日大本山善導寺大殿で行われた。事業には東京都内の大学、専修学校19校から中国、台湾など4カ国43名の応募があり、授業などで欠席の学生をのぞき41名の私費留学生が、集まった。大殿では、浄平協副総裁で、大本山光明寺法主の宮林昭彦台下から、日本の仏教についての話を聞き、希望の本を受け取った。日本仏教の伝統儀礼に、感動する留学生の姿が目立った。

「ブックギフト」は、都内の大学に通う私費留学生の勉学に資するため、希望の図書1万円以内、4冊までの図書を贈呈する活動。「日本に来て、もっとも感動したこと」をテーマに、日本語で小論文を寄せて頂き、合計78冊の図書を贈呈した。小論文では、「日本人から受けた小さな親切に感動した」など、様々に日本での体験が綴られていた。授与式では、留学生を代表して台湾(中華民国)の胡雅凌さんが、宮林台下から図書を受け取り、「今後の勉学の励みとしたい」とお礼の言葉を述べた。

今回の、ブックギフトでは、留学生に簡単なアンケートを実施した。「あなたはアルバイトをしていますか」との問いに大半が「はい」と答えるなど、円高の日本での勉学、生活の大変さが伺えた。また、受領した学生の半分が受け取った図書は「勉強に是非必要なもの」と答えた。来年は、東京での実施はもちろんのこと、関西地区でもこの事業を行えるよう準備を行っている。



第3回のブックギフト事業を終え、いよいよ浄平協の定番事業として認知も広まってきました。

授賞式当日、陪席いただいた小泉副理事長に、この事業の意義などについてお伺いしました。

●
留学生のみなさんが、本を受け取る時の何ともいえないうれしそうな表情、そこにこの事業の意義が表されていると言っても過言ではありません。私たちが想像する以上、図書のプレゼントを待望していたんだと実感しました。

第3回といいますが、まだ東京に限定された実施で

す。これが、全国的に広がるのが、浄平協が真の公益団体へと進化することとなるのでしょうか。来年度からは、滋賀支部の方々と一緒に、ブックギフト in Kansaiを実施する予定です。国際理解が欠かせない現代社会において、留学生を通じてアジア各国にその重要性を発信することは、インドから中国、朝鮮半島を通じて伝えた日本の仏教が、アジア各国へのその恩返しをしているようにも思います。

授賞式でも申し上げましたが、新しい本を開いた時の独特のにおいを誰もが嗅いだ経験があると思います。留学生のみなさんが、プレゼントした本の中においの中に、浄平協の願いを嗅ぎ取ってくれ、開くたびに思い出してくれることを願っています。

高齢者から学んだこと

李 眞善 (韓国・東洋大学)

私が日本に来て最も感動したことは、元気で働く高齢者の姿であった。長寿の国である日本はお年寄りの方が活気があり、自分の仕事に自負心を持っているように感じられたのである。その中でも一つの仕事に長年携わっている方を見ると、その勤勉さや仕事に対する一途な思いに傲慢な私を泣かせたりしたこともあった。

儒教の国で生まれた私は、勉強をする学者が一番の憧れであり羨望の対象であった。そのため、小さい仕事に感謝しながら働く日本の高齢者を、始めの頃はよく不思議に思った。

優れた技術を持っている職人だけではなく、誰もができる仕事を自分の

だけの方法で他人とは違う意識と技で働く高齢者と出会ったことが何度かある。彼らは、ほとんど戦争を覚えている。戦争の怖さや戦後の貧しさを小さい頃から乗り越えようと努力したに違いない。

私が知っている方もやはり戦争を経験して仕事を経験して仕事を求めて上京した。最初は道路掃除の仕事をし、それから技術を身につけて工務店を開業したという。それからずっと同じ職業に60年以上携わってきて、国から功労賞をもらったという話を聞いた。日本ではよくある話であろう。

私の国、韓国では、初めて就職して1年以内に辞める人が一番多いという。日本より韓国の方が就職が厳しいと言われているのにもかかわらず、1年以内で辞めてしまうのはおそらく自分を過大評価しているのではないかと思われる。

長年に仕事をしている日本の高齢者は自分に仕事を合わせたのではなく、また仕事に自分を合わせたのではなく、自分と仕事とが一致できるように長い年月を投資したのである。若い私たちは、仕事が自分の身分を言ってくれと思ひ、まるで職業を装飾品のように思っている。仕事に臨む志より肩書きが一番だと思った。日本に来る前の私も。

しかし、自分を飾ってくれた仕事を捨て、日本に来てからは貧しい留学生になったけれども気持ちだけは豊かである。死ぬまで仕事がしたいという日本の高齢者を見ると、仕事は何を手に入れるための手段ではなく、兎が実現の目的であることを新しく感じるのがある。人間はいずれも年を取る。老年になっても仕事を持って働きながら生きていく人を通して人間の使命を感じることは、おそらく、その人間らしさにひかれ、また、私たち人間は働くため

に生まれてきたと思うからであろう。

今の私は日本に留学した学生として自分の仕事である日本文学文化の勉強をもっと頑張りたい。それは、日本の働く高齢者から学んだことであり最も日本に来て感動したことである。

日本、大好き

努尔司曼古力・玉素甫 (中国・順天堂大学)

私は順天堂大学産婦人科の大学院生です。日本に来て2年経ちました。

大学の頃は日本にじゃなくてカナダは私の夢でしたが、大学5年生の時、私のふるさとにボランティアで来た日本人の先生のおかげで日本語が好きになってそのきっかけで日本語の勉強をし始めました。大学を卒業して、私は自分の夢を実現させるために日本に来ました。今は日本を選んで良かったと思います。

日本に来て一番最初に感じたのは、鉄道がきちんと整備されていて、時刻表通りに動いていることでした。日本に来る前から聞いていましたが、本当かどうかわからなかったです。きちんと並んで順番に乗り降りしている光景にも驚きました。それからどこに行っても地図があって便利だし、何においても規則を守っている人がいっぱいいるので人に安心感を与えます。

ある日は新しいアルバイトの面接に行きました。日本語があまり上手ではないし、道にも詳しくない私にとっては、目的地のビルを探すのは大変難しいことでした。どうしようかわからない気持ちで町を歩いているとき、時間が無いことに気づいて、意を決して通りすがりの人に助けを求めたら、その人は笑顔で私が抱えていた2つのかばんのうち1つを持ってくれ、行きたかったビルの9階まで送り届けてくれ

ブック・ギフト in Tokyo 贈呈内容

- 応募者数 44名 (内1名辞退)
- 授与式参加者数 41名、欠席2名
- 応募者国
 - 参加国4カ国
 - 中国30人、中華民国(台湾)7人、韓国5人、ネパール1人
- 応募者大学別一覧 (アイウエオ順)
 - 青山学院大学1人、アジア・アフリカ語学院1人、亜細亜大学1人、お茶の水女子大学1人、慶應義塾大学3人、国士館大学1人、駒澤大学3人、順天堂大学9人、東京医科歯科大学2人、東京学芸大学2人、東京家政学院大学1人、東京芸術大学1人、東京大学4人、東京農業大学3人、東洋大学2人、日本大学1人、一橋大学2人、武蔵野大学4人、立正大学1人
- 応募者在籍一覧
 - 大学院生31人、大学院生31人、大学研究生2人、語学研修生1人

ました。言葉もあまり通じないし、みな忙しいはずなのに、日本人はこんなに親切なんだと思いました。

面接が終わって家へ帰ろうと駅に来たら、カバンの中にあるはずの財布がありませんでした。さっき面接に行く前に店の場所を聞くために駅前の公衆電話で電話をして、そのまま置いてきてしまったことを思い出しました。お金もないし、定期券も財布の中なので本当にどうやって家へ帰るのがかわからずじまつた。

駅に行ってそのことを駅員に話すと、親切なおじさんが私の財布を駅員の所に持って来てくれたことがわかりました。そのおじさんは名前だけ言って置いたようで、名前は「山口」でした。その日起こったことは、いま思い出しても涙があふれるくらい感動しています。

私は、日本人はとても親切でやさしいと思います。そして、日本が大好きです。

親切な日本人

路 明 (中国・駒沢大学)

日本で3年ほど暮らしていて、日本人の親切さを日々感じている。生活の

中で些細な出来事もあれば、最も感動したこともある。

日本でいろんな方と出会って、日本人の親切さを様々な場面で体験した。

日本語学校の先生は親切だ。

何回も同じ日本語の文法を説明したり、何回も私たちの発音を直したり、時には私たちが書いた日記を何回も読んで内容を理解しようとしてくれたりしていた。

アルバイト先のみなさんは親切だ。

全店唯一の留学生バイトの私は、みんなに面倒を見てもらっている。自分はお料理が上手ではないので、シンノさんが自宅でお料理を作って持ってきてくれた。

バイト中に風邪が急にひどくなって熱まで出した時、エンサカさんが病院まで連れて行ってくれた。花火を見た時、カワサキさんがいっしょに行ってくれた。

周りの方はみんなが親切だ。

その中で最も感動したことがあった。日本に来たばかりの時、友だちと夜に散歩に行った途中、レンジがマンションの下に捨てられていたのに気づいた。近くにいったら、外も中もよさそうで古いだけだった。ラッキーと興奮して、友だちと二人で家まで持って帰ることにした。ちょうどレンジが無かった二人にとって非常にあり

がたかった。しかし、そのレンジは古いので重くて重くて……女の子二人には無理があった。

でもこれが家で使えるなら、と私は左に、友だちは右に立ち、両手で50mくらい運んでみた。やはり重たくて、それくらいしか持てない。次の50mは位置を逆にして一步一步進んでいった。このように運ぶので、家まで1kmほどの距離は山のように感じられた。

キツイな……と二人が凹んでいた時、「大丈夫？ 重そうですね。家に自転車があるから貸してあげるよ」とやさしく声をかけてくれたおばあちゃんがいた。こんな状況の中で、そのおばあちゃんは神様のように見えた。「本当ですか？ 貸していただけるのですか？」友だちは中国の大学で日本語を専攻していたので、丁寧な日本語で慎重に確認した。

するとおばあちゃんは「いいよ、ここで待っててね、取ってくるから。」と、自分の家へ歩いて行った。5分もかからず帰ってきたおばあちゃんは、自転車を貸してくれた。そのおかげで簡単にレンジを家まで持って帰ることができた。

その後、自転車をおばあちゃんに返しに行った。私はまだ華麗な感謝の日本語が出ない時期だったため、自分の中で最高の感謝の気持ちで「ありがとう

ございました」と言った。言葉は簡単だが、胸がいっぱいだった。

そのおばあちゃんにとっては些細なことかもしれないが、私たち二人にとっては非常に大事なことだった。知らない人に自分の自転車を貸すのは、そのおばあちゃん

の親切さであり、日本人の親切さでもある。日本に来て最も感動したのはこのことだ。

後日、イチゴとバナナを買って、そのおばあちゃんに恩返しをした。翌日、おばあちゃんからピザをもらいました。それから私たちは仲良くなりました。そのおばあちゃんは自分たちのおばあちゃんのような存在で、おばあちゃんにとっても自分たちは孫のような存在だった。

2年後に友だちとわたしは大学に進学し、引っ越しをすることとなった。引っ越しをする前、おばあちゃんの好物を買って別れの挨拶に行った。

その後の連絡はほとんど電話だが、先月もそのおばあちゃんに電話をした際、元気に暮らしていることを感じ、何よりだと思った。

これからもずっと元気でいてくださいね、おばあちゃん。

富士登山にて

林 祐家 (台湾・アジア・アフリカ語学院)

時間がたつのは早く、留学生活はもう1年くらいになりました。この間に感動したことはたくさんあります。私が一番感動したことは、半年前に富士山であったことでした。このことは一生忘れません。

ある日友だちと約束して、いっしょに富士山頂に挑戦する事になりました。みんな行く前にパンフレットとか富士山の案内書はいっさい読みませんでした。さらに天気予報も知らず、ただコートを持ってスニーカーを履いて出かけ、こんな乱暴な準備の結果、富士山に登る途中でさまざまな大変なことに何度も遭いました。

山道を登るにしたがって、険しい道が何度も現れました。私たちは何度も

途中から帰ろうと思いました。ところが、ずっと私たちの後ろを登って来ていたおじさんが、

「富士山に登る途中いろいろ険しい道が出てくるけれど、こんなチャンスは一生のうちめったにありません、もし中途半端をしたら必ず後悔します。逆に辛抱の心をもって進めば、山頂に着くと人生観は必ず変わり、未来はどんな難しい状態でも進めるようになりますよ」

と言いました。おじさんの一言に、私たちははっとしました。おじさんの言うとおりに、もしこの挑戦を途中でやめることがあれば、必ず後悔します。私たちはおじさんの励ましに自らを奮い立たせました。

懐中電灯を持っていなかったため、夜道であまり見えない道に何度もつまづきました。でも私たちはあきらめず、お互いに助け合い、転んでもまた起きあがりました。体力が弱い友だちは手をつないでなんとか立ちあがりました。途中おじさんは「気をつけて」「前の人はちょっとゆっくり歩いてあげて」など、何度も声をかけてくれました。

4時間過ぎて、やっと山頂に到着しました。日が昇り、雲海の上に光が広がってきました。この美しい景色に本当に感動し、涙が流れました。大変な登山道は、ついにその価値がありました。私たちは、このおじさんに対して感謝の気持ちでいっぱいです。おじさんに会わなければ絶対に登れませんでした。私は今でも富士山頂の写真を見るたびに、おじさんへの感謝の気持ちがあふれてきます。もし縁があれば、ぜひまたあのおじさんと話がしたいと思っています。

おじさん！ ありがとうございます！

ブック・ギフトで私費留学生に提供した書籍の一部(例)

どんな時どう使う日本語表現文型辞典、看護研究入門 実施・評価・活用、日米関係史 開戦に至る十年—1931-41年(4) マス・メディアと知識人、IQ84 1-3巻セット、コモディティ・デリバティブのすべて、正常画像と並べてわかる救急画像—時間経過で理解する、路地からのまちづくり、自治体改革と教育ガバナンス、最新英和経済ビジネス用語辞典 [単行本]、初級を教える人のための日本語文法ハンドブック、ライフサイエンス英語 類語使い分け辞典、写真史 [ハードカバー]、コトラー&ケラーのマーケティング・マネジメント 第12版、これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学、基礎から学ぶ産婦人科超音波診断、超音波による骨・筋・関節の観察、知的財産法 第5版、STEP内科(4) 腎・呼吸器、SWIFTのすべて、上級マクロ経済学、クラウド セキュリティ&プライバシー リスクとコンプライアンスに対する企業の視点、越境者が読んだ近代日本文学—境界をつくるもの、こわすもの、お菓子の基本大図鑑 ガトー・マルシェ、新TOEICテスト はじめてでも600点が取れる!、西洋経済史 新版 有斐閣双書 入門・基礎知識編、中村天風一日一話、BJTビジネス日本語能力テスト 体験テストと解説 改訂版(CD付)、コトラー&ケラーのマーケティング・マネジメント 第12版、清朝のアムール政策と少数民族、英検1級総合対策教本、日本事情ハンドブック、初級を教える人のための日本語文法ハンドブック、A20 地球の歩き方 スペイン 2010~2011、近代中国東北地域史研究の新視角、ロングマン新TOEICテスト完全オーディオバック800点クリアコース、酒の科学、遺伝子工学実験ノート 上 改訂第3版(無敵のバイオテクニカルシリーズ)、カラー版 ベアール コノーズ パラディーズ 神経科学—脳の探求、上級へのとびら—コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語、病気がみえる (vol.9) 婦人科・乳腺外科、上級へのとびら—コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語、免疫学イラストレイテッド(原書第7版)、ル・コルビュゼ 全作品ガイドブック

失敗も大事な経験

金 暁美 (韓国・武蔵野大学)

日本に来て最も感動したことは、去年「ブックギフト」をもらったことです。実は、応募しても対象になれないと思ってやめようとしたのですが、一応やってみたのが、ありがたく「ブックギフト」をもらえるようになりました。以前の私を考えると応募しても対象になれないと思い込んで、応募しない方でしたが、日本に来てからは考えるよりも行動を重視し、応募することになったと思います。このような変化は韓国ではできなかったことであり、日本に来て得られた宝物で、「ブックギフト」を通して確信するようになりました。

正直、日本に来て感動を受けたことがあまりありません。一日一日が戦いで、レポートの提出が終わると論文の資料探し、発表……と忙しい学校生活を送っています。また、バイトを熱心にしても、日本の高い物価に追いつかなくて、りんご1つも自由に変えないのが今の現状です。そして何よりも母国でひとり暮らしの母のことが心配で、心の中の重荷になって感動的なことが目の前に起きてても感じられない状況で

もあります。

日本での生活は、うれしいことや楽しいことではなく、一日一日が生き残るための戦いでもあります。しかし、この戦いを通して貴重な知恵を得たのも事実です。その中のひとつが、世の中は考えや話の実践がないと、なにも成り立たないことをしみじみ感じたことです。母国で、豊かな生活ではないが不足のない生活をしてきたせいか、少しでも不便なことや厄介なこと、失敗しそうなことはやろうとしなかったです。しかし、今はやらないと何も得られないので、一応やります。失敗しても大事な経験になるし、もし成功する場合はかけがえのない大事なものになるから、チャンスと思うものは何にでもやってみようになったのです。

そして「ブックギフト」に応募してから、自信ができたおかげで、応募条件が厳しい奨学金にも挑戦し、ありがたくいただくことになりました。以前の私なら得られないものですが、日本に来て「ブックギフト」の教えから実践した結果だと思っています。もともと仏教信者である私にとっては、これば仏教の教えだと思い、大事にしています。

また、このような教えを実践している浄土宗平和協会の方々にもお礼申し上げます。



宮林副総裁の話を聞く留学生ら

混迷する現代社会に対し、われわれ浄土宗は何を放つ存在であり得るのか。法然上人の説かれた「愚者の自覚」に立ち返って、肥大する数々の課題をどのように向き合うことができるのか。今回は「アーユス仏教国際協力ネットワーク」の枝木さんにご寄稿いただきました。

アーユス仏教国際協力ネットワーク・事務局次長
浄土宗平和賞選考委員

枝木美香



世界にお布施！ お坊さんだって国際協力

■アーユスの成り立ち

アーユスは、1993年に日本の仏教者有志によって設立されたNGOである。特定の教団には属さず、メンバーの宗派は問わず、仏教の基本理念である「縁起」のもとに結成された。

NGOを支えるNGOという姿勢を掲げ、国際協力活動を実践する団体を資金面で支える団体として発足した。海外で直接の援助活動をするのがNGO活動の主流であるにも拘わらず、なぜNGOを支えるNGOという黒子的な役割を選んだのか。それは発足の過程で、日本の僧侶たちによる国際援助活動の経験があったためである。

1979年のポルポト政権崩壊と共に、カンボジアからは多くの人々が難民となって国外へ逃がれた。タイ・カンボジア国境には数多くの難民キャンプが設立され、世界各国から援助団体が支援に入り積極的な支援活動を展開した。一方、日本は「トヨタさん」と「ホンダさん」しかいないと揶揄されたように、NGOなどによる支援は他国よりも遅れをとり、仏教界でも他国のキリスト教系グループに比べれば支援の出足は遅かったと言われる。

しかし、バンコクに本部を置く世界仏教徒会議からの要請もあり、全日本仏教青年会が音頭を取って募金活動を実施し、現場へ支援金を現場に届けに行ったことは、日本の仏教界の目を世界に向けさせる大きなきっかけとなった。そして、この時の活動が、今日の仏教系NGOの基盤を作ったと言える。

■メンバーとの出会い

アーユス発足の呼びかけを行ったのは、90年代始めの浄土宗東京教区青年会（東京浄青）のメンバーだった。東京浄青は全日本仏教青年会との関係でインドシナ難民支援に積極的に協力し、街頭募金などを実施しながら支

援金を集めると共に、実際に現地視察にも赴いた。

アーユスの設立時からの理事長である茂田真澄は浄土宗僧侶であり、東京浄青でインドシナ難民救援に奔走するメンバーの一人だった。茂田は、カンボジアの状況もわからないまま、お金を集めさえすればいいと思っていたが、現場に行ってみてそれまでの価値観が180度変わったという。これは、どの僧侶にも共通して言えることであり、誰もが自分たちの力のなさを痛感させられたのだ。

足を踏み入れたキャンプには、異臭を放つ薄黒い肌をしたカンボジア人がテント生活をしていた。体験したことがない暮らし。毎日のように誰かが亡くなっていくのに何もできない。言葉も通じなければ、助ける術もない。無力感に打ちのめされている時、難民の人たちに寄り添いながら活動をしていたNGOのメンバーに出会ったという。

その頃には既に、日本の若い世代が続々とタイを訪れ、ボランティア活動に励んでいた。彼らはタイの日本人会とも連携をとり、医療や教育の支援、井戸掘りなどに勤しんでいた。情報交換を密にしながら、一生懸命に救援活動をしていた彼らの姿に、浄土宗の僧侶たちは大きく心を動かされた。また同時に、彼らを支えたいという気持ちも沸き上がったという。

■ブータンでの教訓

インドシナ難民救援が一段落した後も、東京浄青は精力的に国際問題にかかわっていくことになるが、その中にブータンに簡易保健所を建てる活動があった。これは、東京浄青に国際救援委員会という部門を立ち上げ、UNICEF（国連児童基金）を通じて取り組んだもので、この活動の中で得た教訓が、そして、アーユスの設立に大きな影響を及ぼすことになった。

当時、ブータンはちょうど国際社会に窓を開いたばかりで、東京浄青のメンバーが完成した簡易保健所の開所式に参加した時は、ブータンの人たちの素朴な人柄と自給

自足の暮らしぶりにいたく感動し、支援を行ってよかったと心から思った。ところが、2年後、モニタリングのために再度ブータンを訪ねてみると、外国資本の流入によって、経済開発は進んだものの、盗難事件が起きるなど社会に歪みが生じているのを知った。よかれと思ってやったことが、実際にはその社会に負の影響も与える場合もある。ブータンのケースはそうしたケースのひとつだった。誰のための何のための国際援助なのか。支援に関わった僧侶たちは、寺務の傍ら、国際協力活動のあり方について深く考えさせられた。

現地の社会変化や海外援助の影響に目を配りながら、適切な援助を行うためには、片手間の活動では不十分である。現地に駐在するか、もしくは常に状況を推移をチェックできる仕組みが必要になる。何か力になりたいという思いはあっても、それが一方的な支援に終わった場合、必ずしも現地の人たちへの貢献にはならないということを、ブータンでの経験から私たちは学んだのである。

■グローバル化のもとでの新たな活動スタイル

このように、アーユスがNGOを支えるNGOという活動スタイルを選んだのは、インドシナ難民の救援活動やブータンでの経験があったからである。現地の支援に中途半端な形で関わるのではなく、NGOを後方支援するというやり方だ。きちんとした活動をしているNGOは、世界情勢と照らし合わせて現場の状況を判断し、現地の人たちと一緒に将来のビジョンを描きだす力がある。それをサポートをすることによって、アーユスもまた国際貢献ができる。日本にある寺院数はコンビニの数よりも多い。寺院から協力金を集め、これを支援金としてNGOに送り、NGOからは現場の状況を伝えてもらい、アーユスの活動に生かす。このような関係を私たちは目指したのである。

1990年代に入ると、東京浄青の中にも、このまま活動を続けていくことに迷いを覚えるものが出始めた。しかし同時に、湾岸戦争を契機に、浄土宗以外の宗派でも活発な非戦の動きがみられた時期でもあったので、東京浄青の主だったメンバーは浄土宗から離れ、宗派の垣根を越えたNGOとしてスタートすることを決意した。

日本の仏教界が内向き傾向になりつつあった当時、もっと世界に目を向けてもらい、グローバル化が進む世界で起きる問題を日本との関わりの中かで考えてもらいたいという思いがあったのである。

■今後の展望

仏教者の目を外に向けさせることが、現状の課題のひとつだと考えている。日本社会が内向きになっている時は、仏教界も同じく内向きになっている。檀家さんや信者さんの要求が内向きであれば、それに応える仏教界も内向きになるということだ。しかし、仏教は本来、私たちの目が内向きであれば外に向けさせ、外にしか向いていないときは内を向かせるという、息詰まりを打破する力を持っている。一方に偏らず、常に新しい方向に目を向けさせることで、人々は悩みに固執せずに生きていけるのである。ところが、現在の日本の仏教界をみるとき、一部の僧侶の方々を除いて、外のことに取って関わろうとしない風潮を感じる。

2008年11月に東京で世界仏教徒会議が開催された。そこでは、「仏教者の社会問題解決への貢献」をテーマに7つ課題に分かれてのシンポジウムがもたれ、世界各地から多くの活動家が集まった。「平和」「青少年」「環境」「自死」「仏教的社会開発」「終末期医療」「ジェンダー」といった注目すべきテーマが並び、それぞれのシンポジウムは内容の濃いものになったのだが、その後も日本の仏教界に社会活動を実施するという大きなうねりを生み出すには至っていない。

アーユスの活動には独特なものがあり、またアーユスという看板を掲げた時点で、既に「色」付きで見られることが多いため、全ての仏教者から支援を受けるというわけにはいかない。活動の方向性に賛同できない仏教者もいるし、むしろそれは自然なことだと思う。ただ、社会に対して何かをしたいが、何をしたいのかわからないという仏教者もいる。そのような人たちが一歩を踏み出せる場所としてアーユスはあるのだから、参加できるメニューを増やすなど、もっと積極的な働きかけも必要になるだろう。

世界で起きている様々な事象や人物に接することは、仏教を説いていく上で大きなエネルギーとなる。困難を抱えて生きている人たちが、ささやかな喜びを大切にしている人たちと出会う中で、閉鎖的な日本社会にはないパワーを感じることもある。アーユスはそういう機会を提供する役割も担っている。

ビルマやパレスチナに関わっていると、宗教が持つ危険性を感じる一方で、人々が生きる道をきりひらく力を持っていると強く感じる。世界とつながることは、足下を見つめ直す絶好の契機になるだろう。

未来を担う子どもたちのために

平和念仏募金によるNGO支援は、昨年度から引き続きの5団体に加え、今年より新たにNPO法人ユニへの支援が始まりました。NPO法人ユニは、浄土教師である遠藤暁及師が代表を務める団体で、2006年に設立されました。

昨年「ダーナ」15号の「浄土宗と社会」に、遠藤師から寄稿をいただきましたが、お寺が運営主体となって進めるNPO法人ユニが行う様々な活動は、徐々に広がりを見せています。

心の豊かさを与え合う

ユニは、「心を豊かさを与え合う」を理念として活動するNPOである。与えられた人がまた、与える存在になること、そしてそれが無限連鎖で繋がっていくこと、国境、人種、宗教、思想、信条の別なく、「心の豊かさを与え合う」という願いを基に活動している。

ユニの原点は、遠藤師のタオ指圧の講習、念仏ワークショップ等にある。アジアの国々を旅行していた経験から、豊かな日本から何がしかの支援を、と思ったことが出発点だと遠藤師は言う。個人レベルの活動が、タオ指圧を学ぶメンバーへと広がりを見せ、それが現在のNPO法人へと続いている。

ユニの活動は、3つの柱から成り立っている。

ひとつは「海外支援活動」で、バングラディッシュ教育支援を継続して行っている。ふたつめは「気と心の寺小屋」。今まで気付かなかった、心の可能性を発見していくことを目指して、ワークショップ形式で行う講座。三つめは「チャリティ施術」で、タオ療法の門下生によるタオ療法の簡易版。そして、後者二つの収入は、主に海外援助の資金として使われている。

その多岐にわたる活動の根本は、

仏教の「利他」の精神にある。かつて、福祉活動などをしながら諸国を巡った遊行僧・念佛聖をモデルにしているという。

相互扶助のネットワークを

浄平協が支援するユニの活動は、「ラカイン・プロジェクト」だ。ラカインとはバングラデシュの少数民族の一つである。

ラカイン族は、ミャンマー北西部アラカン州からバングラデシュ南東部の地域に暮らし、紀元前から当地に王国を築いてきた古い歴史を持つという。イスラム教徒がほとんどのバングラデシュにおいて、仏教を信仰する数少ない部族だ。しかし、国家財政の三分の二を海外からの援助、特に同じイスラム教国である中東のアラブ諸国に頼っているバングラデシュにとっては、これまで少数民族仏教徒は迫害の対象であった。仏教徒は存在しないことになっているようなものだからである。

現在、バングラデシュには約17,000人のラカイン族の人々が暮らしているが、人口の0.012%に過ぎず、少数民族である彼らには海外からの支援も届かない。彼らの多くは、家族

農業により生計を立てており、農業の収穫は、雨期の洪水や毎年起こるサイクロンの影響を受けやすく、苦しい生活を余儀なくされている。心のよりどころであるはずの、仏舍利等などの仏教伽藍も荒廃し、将来の夢を描けない若者は、やむなく、愛する村を離れ、共同体は存続の危機に立たされているのが現実だ。

多くの子どもが教育の機会も奪われ、就職もなかなかできない現状で、未来を担う子どもたちに教育の機会を与えようというのが、ユニの「ラカイン・プロジェクト」だ。そして、教育支援を通じてラカインの人々の相互扶助のネットワークを創り、経済的にも豊かになるシステムを造ることが、最終の目標なのだという。

その中核となる「ラカインセンター」が、この10月にオープンしたという。これからの活動を注視していきたい。



ユニが支援するチョドリパーラー村の小学校

「第3回浄土宗平和賞」×切り迫る ～ぜひ多くの推薦をお願いします～

社会参加のお寺を支援し、顕彰する「浄土宗平和賞」(JPA主催)の推薦締め切りが、来年1月末日に迫っています。

この賞は、浄土宗の教義を広め、儀式を行うという寺院の活動にとどまらず、「社会参加する仏教」を志向し、平和活動、環境保護活動、国際交流活動、地域福祉活動など、幅広い分野で公益のための活動を行っている浄土宗寺院・教師または浄土宗教師が代表(中心的な役員)を務める団体を顕彰し、支援するものです。また同時に浄土宗平和協会の広報誌「ダーナ」などを通じて受賞寺院(浄土宗教師)の活動内容や、ノウハウなどの情報を提供し、活動事例として各会員の社会参加型事業への取り組みを啓蒙、醸成することを目的として創設されました。

平和賞という名称から反戦・反核などの政治的平和運動や海外の紛争地域における貧困や医療、また教育に関する対策といった海外援助を連想される方も多いと思いますが、それらに限定されることなく、地域や各コミュニティで公益のために活動することは共生の理念の発露であり、おのずと世界の平和に寄与するものと考えます。

また数々の活動事例を提供し、浄土宗寺院や教師の社会参加を推し進め、宗教的救済と共に社会への働きかけを促し公益に資する未来の寺院のあり方を模索して行きたいと思っています。

◆賞の内容

賞状・平和賞レリーフ(三橋國民氏作)・副賞(50万円)

◆表彰対象

1. 浄土宗寺院・教師
2. 浄土宗教師・寺族が代表(中心的な役員)を務める団体

◆選考方法・表彰

浄土宗平和協会が選定する平和賞選考委員会によって選考し、浄土宗平和協会総会の席上、表彰し副賞を授与します。

◆募集方法

1. 公募(自薦他薦問わず)
2. 教区長、教化団長、教化センター長、並びに浄土宗平和協会会員による推薦
3. 選考委員推薦

◆応募・締切

応募の締切は平成22年2月末日です。

◆以下の団体は、本年度も推薦委員会で、平和賞候補として審議されることが決定しています。

- ①つきかげ堂
福井 純史 京都教区 国際交流
- ②NPO法人ユニ
遠藤暁及 京都教区 国際協力、国内被災支援
- ③NPOグローバル・ヒューマン・サポーターズ
本多 義敬 東京教区 留学生支援・国際援助
- ④パネルシアター
武智 公英 東京教区 国際交流
- ⑤圓福寺
池田 常臣 埼玉教区 地域活性化活動

《推薦書送付先/お問合せ》

JPA東京事務局(平和賞担当:杉浦靖俊)
〒191-0011
東京都日野市日野本町2-12-13
大昌寺内
TEL:042-581-2125 FAX:042-581-2125



浄平協創立20周年で記念誌

浄土宗平和協会が、平成2年に平和協議会として創立されて、今年で20周年を迎えた。これを記念して、会員ほか宗内関係者に対して、記念誌を発行する。

ブック・ギフト in Tokyoを実施して3回となるが、それぞれの回に、留学生から「日本」「平和」などについて、小論文を募集している。この内容が、日ごろ気付かない日本の良さなどを表現しており、この作文をまとめて書籍とする。そのほか、浄平協の歩みなど資料も掲載する。発行は21年度夏の予定。

ブック・ギフト in TOKYO アンケート実施

今回3回目となるブック・ギフトは応募者数44名、内1名が辞退し、授与式出席の39名の留学生に対し簡単なアンケート調査を行い、その一部を紹介する。

今回の出身国は全員アジア圏で、中国30名、台湾7名、韓国5



名、ネパール1名となり、18校の大学、1校の語学学校から応募があった。大学ではその7割が大学院生である。

日本を留学先に選んだわけを尋ねると、①経済と文化に深い関係があるから、②学ぶ学科がある、③自国のため、④仕事、将来のため、⑤学ぶ学科が進んでいるため、⑥日本への憧れ、夢、等がその理由とされている。

私費留学を選んだことについては①勉強の道が私費留学しかない、②国費留学の対象外(専攻や年齢関係)、③国費留学の申請

が難しい、④国費留学は相当の成績が必要、⑤自由に学科が選べる、⑥客観的に母国を見ることが出来る、⑦自分ため、⑧日本で勉強したい等となっている。

卒業後の進路にあつては、3割の学生がさらに他の大学等で学ぶことを希望している。また、7割の学生が学費、生活費のためにアルバイトを行っている。このブック・ギフトの事業に望むことについて尋ねると、多くの学生から感謝をいただき、この事業の継続をお願いされた。

事務センターを設置

浄土宗平和協会は、これまで事業の諸事務を、宗務庁に依頼していたが、真の公益団体として活動するためもあり、諸事務、諸会計を担う事務センターを設置した。

事務センターは、会計担当の浄平康事務局員大島康裕上人のお寺におき、担当職員は斉藤美香さん。事務センターの住所は以下の通り。

〒121-0832
東京都足立区古千谷本町2-12-18
電話03-3855-8781
ファックス03-3855-8782

ブックギフト in Kansai 実施

円高の日本で苦勞しながら勉学に励むブックギフト事業が拡大する。来年度を目標に、ブックギフト in Kansaiを行うよう事務をすすめている。現在のところ、対象は、大阪府、京都府、滋賀県に

ある大学、専修学校などに通学する私費留学生。ブックギフト in Tokyoと同じように、小論文提出義務を課し、一人1万円まで(最大4冊)の書籍を贈ろうというもの。授与式の会場は京都市内にある浄土宗の大本山で行う予定。

「共生子ども会議」で共同ポスター

浄平協ほか、浄土宗保育協会、浄土宗児童教化連盟の3団体で作る「共生子ども会議」の連絡

会が、このほど行われ、3団体共同でポスターを作ることを決定した。

ポスターは、「共生」「いのちやさしく」をテーマに、A2判のカラーポスターを約4000部作製する。来年度平成23年6月を目標として制作を行っている。

「共生子ども会議」は、浄土宗の公益団体として、互いに協力できる体制を作ろうと昨年結成された。今後も、広報資料の共同制作、イベントの共同開催などを行い連携を深める。

「平和基金」実施規定を検討

浄平協には、平成2年の活動当初より、平和念仏募金(当初は「聖日献金」)や、様々な緊急募金の残金、設立当初の特別寄付などにより、「平和基金」と呼ばれる特別会計がある。現在高は約17,510,000円。

この「基金」について、何らかの運用、実施規則の必要性があり、理事会などで規則の検討を始めた。

私も浄平協会員

千葉県教区善照寺
今岡達雄師



今回の「私も浄平協会員」は、千葉県教区善照寺の今岡達雄師です。

インターネットと宗教、生命倫理の問題などに対して、社会に対して提言をなされてきた今岡師。荻野理事長、小林副理事長とは旧知の間柄だからこそ、浄平協に対してすくし辛口のご期待をお話いただきました。

浄土宗平和協会に入会したのは、10年ほど前だったと思いますが、あまりよく覚えていません。

僧侶、寺というものは、社会的な使命を果たすべき存在だと、誰も感じていらっしゃることでしょけれど、なかなか個としてその役割を担うことが難しいのが現状です。かくいう私も、アジアの国々が、困難な状況を抱えていることを知りながら、支援をする術をなかなか見つけられずにいました。そんな時に、浄平協の存在を知ったのです。

ちょうどNGOやNPOの活動が、社会的な認知も十分広まった頃でしたでしょうか。もちろんしっかりとフィードバックしている団体はあるのでしょうけれど、崇高な理念を掲げて活動している団体が数多あれども、個人々が支援した金銭なりがどのような形になって現地に届けられているのかをなかなか知ることはできません。

浄平協は、そんな中で数あるNGOの中から選別した団体に支援をし、それがどのように形となっていくのかをマネジメントしてくれるところが魅力だと思っています。ただ近年、事業を拡大していく傾向にあるようですが、私はあまり賛成しません。手を広げれば広げるほど、原点にある理念が薄れていきそうに思うからです。

仏教系の支援団体、あるいは個々のお寺でも国際協力を行うところが多くなっていました。それらのことを否定するのではありませんが、日本仏教の存在を高めるためには、それぞれの活動を統括していくことも必要なのではないでしょうか。

浄平協は、宗内の唯一の平和団体でしょう。ならば、よりその使命は、重要だと思います。今の活動を結集しながら、内外に浄土宗の、仏教の平和の精神が伝えられるような事業の展開を期待したいと思っています。

